
Quiet Circus

矢鳥すだち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Q u i e t C i r c u s

【Nコード】

N 5 4 6 3 U

【作者名】

矢鳥すだち

【あらすじ】

天ノ宮連続失踪事件。――最近のニュース番組は、この話題で持ちきりだ。

天ノ宮とは、僕らの住む街。そう、この不気味な事件の舞台は、残念なことに僕らの街だ。

一人、また一人と、日に日に住民が消えていく。不気味なのは、まだ誰一人として死体が見つかっていないこと。指の骨、歯、手首、そういう欠片は見つかるのに、当の本人はどこにもいない。

だから連続失踪事件。生死すら、不明。

……昨日失踪した彼女、あんまり美味しくなかったなあ。

自サイトでも連載しています。

Opening Bell (前書き)

カニバリズム描写などを含みます。
閲覧にはくれぐれもご注意ください。

Opening Bell

がりり、がりり。くち、くちや。

咀嚼の音が夜闇に響く。昨晚の雨のせいだろうか、コンクリートはひどく湿っていた。

工場内は暗い。今では誰も訪れないこの工場は、寂れた空気で満たされている。埃の匂い、それ以上に、鉄の匂い。血の匂い。その音はあまりに異質であった。何か……肉を食らっているような。ぴちゃり、ぴちゃりと、血液を弾く音がする。

「——美味しい。」

少年はうつ伏せの状態から立ち上がり、ぐい、と腕で口元を拭う。セピアの風味を帯びた血が青年の袖口を汚す。真白なシャツが、濁った朱に染まる。

天井を見上げる。一面の黒はどこどころ外からの光に照らされて、白い。彼は再びしゃがみ込んで、何かを思い切り引きちぎった。ぶちぶちぶち。

「……夜食としては、上出来かな。」

彼は引きちぎった“何か”を放るようになげ捨てた。“何か”は何度かゴムのように跳ね、工場外へと転がっていく。上空で雲が流れた。——現れた月が照らしたそれは、

人間の、手首であった。

「アクト、おいアクトってば——アークトっ!!」

「何さ、うるさいなあ」

机に突っ伏して寝ていた僕は、友人の声で目を覚ました。んーっ、と大きく伸びをする。寝ぼけ眼で顔を上げ、黒縁の眼鏡をかけ直す。僕はクラスメイトに目を向けた。

「よっアクト。遅いお目覚めですなあ、もう昼休み終わったぜ?」

「うつそ、」

慌てて時計に目をやれば、なるほど針は一時を指していて。……
ちよいとうつかりしすぎじゃないの。

「次移動だぞ？」

「だよねやつば、ありがと、助かった」

「どういたしまして。」

んじゃ俺、先行ってつぞ。彼はそう言い残すと、教室を出て行ってしまった。 どうせなら待ってくればいいのに……妙なところで薄情だな。

「つと、早く着替えないと」

再び時計を見て焦る。あと五分しかないじゃん——次、体育なのに。

「よく間に合ったな！」

友人の声に苦笑を返す。授業の前から息上がってるよ……バカじゃないの僕。

「体育とかたらしいー」

「だよね。あーやだなあ、外寒いし」

列に並んで、隣の奴と愚痴り合う。風が冷たい。真冬のグラウンドは、曇り空に染められている。

「あーそうそう、朝二ニュース見てきた？アクト」

「朝？ いや、今日は見てないや」

ぐつと伸脚しつつ、返す。と、彼はどこか安心しきった、ひどく下世話な笑みを浮かべた。

「昨日もまた一人——いなくなったらしいぜ」

天ノ宮連続失踪事件。——最近の二ニュース番組は、この話題で持ちきりだ。

天ノ宮とは、僕らの住む街。そう、この事件の舞台は、残念なこ

とに僕らの街だ。

一人、また一人と、日に日に住民が消えていく。不気味なのは、まだ誰一人として死体が見つかっていないこと。指の骨、歯、手首、そういう欠片は見つかるのに、当の本人はどこにもいない。

だから連続失踪事件。 生死すら、不明。

「怖えよなー。いなくなった人たちって、何の共通点もないんだろ？」

「らしいね。」

個人個人で付き合いがあった場合もなくはなかった。が、もし犯人がいるとして、彼一（または、彼女）がターゲットを絞った理由にはとてもなりそうにない。せいぜい二、三人が交流を持っていた程度。すでに十人以上が消えている大規模な失踪事件。……そのヒントとしては、使えない。

「唯一の共通点は、」

「失踪者全員が天ノ宮に住んでいたこと。 それだけ」

「……不気味だよなあ、だって一部しか見つからないんだぜ？」

「この前の人は、……足、だっけ」

「そう。足首で引きちぎられた、男性の左足」

「バラバラ？ 監禁？ 犯人の意図は何？」

「気持ち悪いー」

「足だけってのがね、どうもね」

キチガイだよ、キチガイ。キチガイのやることだ。

クラスメイトはそう言っで、静かに屈伸を始めた。僕は腕を伸ばしながら、彼の言葉に思いを馳せる。

キチガイ、ね。

「……寒、」

はあ、とため息をつく、息は白くなって浮かび上がった。って

ことは、今10 以下なのか。くだらない知識を思い出す。

一人で帰るのはなかなか寂しい。一人ぼっちで歩いていると、北風も余計に堪える。僕はマフラーに顔を埋めた。

何かいいこと、ないかなあ。

ざつ、ざつ。靴が砂を蹴る感覚。うつむいて地面を見る。本当

に平凡な夕暮れ。

平凡な。

「……あれ？」

顔を上げ、息を吸ってみる。やっぱりだ、匂ってきてる。僕はこの匂いには鋭い。

匂いにつられて路地を曲がる。突っ切って入って曲がって下りて、橋を渡ってひたすら歩いて。気づけば家から離れてしまった。まあいい、ここまで来たら突き止めてやろう。匂いが強くなっている。僕は細い路地に入った。

「あ、」

あ。

ああ。なんだ、これ。

「——死体、じゃん。」

僕の目に映ったのは、倒れ伏す一人の少女。制服からして、僕の学校の生徒だろう。その髪型には見覚えがあった。おそらく、僕の後輩だ。确实、間違いない。いい匂い、僕が愛する、大好きな匂い、大好きな食物の匂い。

血の香り。

首筋から流れるその液体。赤。目が釘付けになる。美味しそう、綺麗、美味しそう。僕は浮き立つ心を隠しきれずに、思わず舌なめずりした。構わない。どうせ、誰も見ちゃいないんだ。

「——デザートには、丁度いいかな。」

「すつきりした。」

くるくるくる。ナイフの柄を、ペン回しみたく指でいじくる。人を切ったばかりというのに、水で洗っただけのそれは夕日できらめき美しく光った。気分がいい。鼻歌の一つも歌いたい。脳味噌が、熱い、いい感じ。どうにもすこぶる、いい調子。でも。

「——誰だよ、死体隠してんのは」
引っかかるのはその疑問。俺が殺した人々を、隠してんのは一体誰だ。

堂々と置いてしまえばまるで阿呆の所業のようだ、だから路地とか廃工場とか、あまり人目につかないところに置くようにはしてるけど……警察だったらすぐ見つけられる。第一、俺はむしろ見つかってほしいんだから。

証拠なんて残していない。死体が見つかったところで俺に捜査は及ばない。失踪事件、だなんて、お茶を濁されるのは気に食わない。捕まりたい訳じゃないよ？ もちろん。だけど、俺が犯した殺人が、他の誰かの手柄になるのは——ちよつとだけ嫌な気分だ。

指だの足だの、ろくでもないものばかり残して。これじゃまるで猟奇殺人だ。俺はただ殺したいだけで、ぐちゃぐちゃにしたいわけじゃない。

「……イラつく。」
って、もったいないじゃないか。せつかく気分がいいっていうのに、苛々するのは馬鹿馬鹿しい。考えないようにしよう。

ほら、早く帰らないと。妹が、俺を待ってる。

「んぐ、——うは、はあつ、ん、くはつ、あは、」
血液を嚥下する。ねっとりした液体のその味を、感覚を、焼き付けるように味わい尽くす。細腕にかじりつき噛みちぎると、皮膚が嫌いな音を立てた。ぶちぶちっ、でも、この音は好き。食欲が増す。体が熱い。特に、頬が。紅潮してる。まあいい、どうせ血も飛んで

るんだ。赤くたって目立ちはない。

「……もういいか。お腹、いっぱい。」

座り込み、手の甲で口元を拭う。制服が汚れてしまった。バレずに帰れるかなあ？ 上着、脱げばいいか。

傍らに置いた眼鏡に、手を伸ばす。黒縁の眼鏡に血液が付着する。その赤は眼鏡の黒に見事に映えてしまっていた。立ち上がり、血だらけの手を舐める。ゆっくりと、丁寧に、その赤が見えなくなるまで。バレるとかバレないとかじゃない、もったいないでしょ？ 食べ物粗末にしちゃだめだ。

「ん……美味しかったあ……」

自然と頬が緩むのが分かる。恍惚感、充足感。満たされる。

天ノ宮連続失踪事件。本当は連続殺人なんだろう。僕が事態をややこしくしてる。僕が死体を食べちゃうから、その骨を埋めちゃうから——死体は一部しか見つからないんだ。僕の、食べ残ししかでもさあ、僕は殺してる訳じゃない。目の前に御馳走があつて、周りには誰もいないのに、食べちゃダメなんてひどくない？僕はそんなに悪くないはずだ。……きもちい、な。あたまがふわふわしている。鼓動の速さも体温も、全部全てが心地いい。きもちいい。

「——帰ろう。」

コートを脱いで肘にかける。僕は路地を後にした。

明日も、明後日も、平凡な僕を演じる為に。

Hello, hello.

「響兄」

名を呼ぶ声に振り返る。俺をこう呼ぶ人間は、俺の知る限り一人しかない。

「音瀬。どーした、何か用？」

「用って程のもんじゃないけど、今日仕事入ってる？」

「いや？」

「そ。じゃー響兄今日は早く帰ってきなよ。音羽がご飯作るってさ。」

「おお、と思わず声がもれる。給仕さんが作ってくれる料理もちろん美味しいけれど、家族が作ってくれる料理って、やっぱり特別だ。幸福感で満ちている。特に音羽は料理が上手い。軽く想像したら、もう腹が減ってきた。」

「おーマジか！ だったら俺ダッシュで帰るわ」

「三秒で力つきるんじゃない？」

「兄の体力バカにしすぎ」

そんなものでしょ、響兄の体力なんざ。小馬鹿にしたように鼻を鳴らすと、かわいくない妹は素っ気なく教室を去った。小さくため息をつき、教科書をカバンにつめなおす。 じゃあ今日は出来そうにないな。

犯人、探そうと思ってたのに。

「やあ響真、これから部活？」

「おーアクト！ いやーこのまま直帰ですねー」

廊下でばったり鉢合わせたのは、同じクラスの嶋原だった。

「アクトは部活？」

「うっん、僕も直帰。たるいじゃん部活とか。」

アクトは退屈そうに窓の外を見やった。くい、と軽く眼鏡をあける。レンズが外の景色を映した。

廊下はオレンジ色で染め上げられている。マーマレードの瓶のように、床に近付くにつれて濃く、強く。深い緑の掲示板。薄茶色の古ぼけた校舎。あつらえたかのような景色。

「一人で帰んの？」

「おう。音瀬のヤツ、もう帰っちまったっぽいし。」

「音瀬？ ああ妹さんか、あの飛び級の。」

アクトの言葉に頷きを返す。音瀬の頭は出来がいい。年齢的には中三なのに学年は俺と同じで、高二だ。

「出来のいい妹って厄介だぜ？」

「かもね、見下されそう。」

「そーなんだよ！ 本当かわいくなってさ……その点お前は頭いいーもんな、羨ましーぜ優等生！」

ぱしつと大きく背中を叩けば、背の高くない同級生は、少し嫌そうに顔をしかめた。やめてよね。

「僕は頭はよくないよ。頭なんてよくなくても優等生にはなれるんだし。」

「そこは否定しねーんだ？」

「あんまり謙遜してもあれでしょ。」

にま、と笑うと、嶋原は一步身を引いた。バイバイと小さく手を振る。そろそろ、僕は帰るよ。

「おう、じゃあなーアクト。」

帰る方向が同じなのは知ってた。特に仲良くもないとはいえ一緒に帰っても不自然はない。それでも別々に帰ろうとしたのは、無意識のうちに気付いていたからかもしれない。俺らは互いに一人が好きだ。俺らは互いに、“人気者”だから。

あ、ヤバイ。

疼きを感じて立ち止まる。ポケットから左手を抜き出せば、ほんのわずかに震えていた。自分にしか把握できない微かな震え。知っている、震えはじき止まる。代わりに疼きが肥大して堪え難いまでに苦しめる。そうなる前に、発散しないと、

「——しゃーねえな、殺つてこようか。」

ポケットから果物ナイフを取り出す。さて、今日はどなたにしようか。

刺したナイフをつつかえにしてずると死体を引きずる。血は残さない、額ぶっ刺しただけ。血なんて垂らさない、証が残る。

二日前に作った死体はまだ見つかったもいない。様子見がてら同じ場所に捨てよう。死体で遊ぶ醜い犯人の、手がかりに、なるかもしれない。

静かに廃校の門をくぐった。錆びた黒色の重厚な門はどこころ塗装が剥がれて、蝕まれた体内を晒している。グラウンドは灰色で、時々有害そうな砂埃が舞った。今にも崩れそうなコンクリート。欠けて鉄骨を見せつける壁。ひび割れて、廃れた空間。終わっていただくだけの存在。この救いのなさが心地よくて、俺はついつい入り浸ってしまう。安堵する、終演の匂いのする場所。

廃墟。

死体を引きずり三階を目指す。随所随所から、かつて小学校であったというこの場所の名残が垣間見えた。けれどもそんな見知らぬノスタルジアに浸ってるほど暇じゃない、俺は足を止めずに理科実験室に向かう。

「——ん？」

足を止める。音がする。ひどく異質な……血なまぐさい音が。

血の香り、好きじゃない、気味が悪い、すごく嫌いだ。この音はなんだ？ 聞き苦しい。

「何、——なんてなあ。」

大ウソ、俺は分かっている。この音を聞いた瞬間に俺にはもう分かりきってた。

ずるり、ずるり、歩き出す。音の元凶へ。第二理科実験室へ。もう少し、あと少し、戸が見えた、開いている、音がする、匂いがする、近付いた、ほら、……踏み込んだ。

彼は死体を喰らっていた。

実験台の上に死体を座らせ、抱きつくようにかぶりついてる。首元に歯が食い込んで、鼓動のないその身体から静かに血が流れ出た。くちくちくちくち、皮膚が噛み切られ、千切られ、口に入れられ、咀嚼される。実に気持ち良さそうに、何度も何度も噛み締められてその死体は紛れもない、俺が二日前に殺した少女。二つ結びの金髪が自身の血に塗れている。制服は肩の辺りまで脱がされていた。歪に齧り取られた身体。美しくない。

彼はようやく俺に気付いた。肉を飲み込み死体を手放す。その上に乗ったまま、彼は思い切り口元を拭った。いつもとは違い、レンズ越しでないその瞳が、……悪意たつぷりの色味で緩む。

「ハロー、人殺し。覗き見趣味でもあるのかい？」

「ハロー、人喰い。最中だとは知らなかったよ。」

笑みを歪めつつそう返せば、優等生は愉快げに笑った。

「君だったんだね、紫雪響真。」

S h a l l w e d a n c e ? (前書き)

欠損描写あり。

Shall we dance?

わずかに金属音がする。音の発生源に目を向ければ、“彼”は至極真面目にノートを開いていた。さっき出た宿題もうやってんだ。クラスの優等生に感心しつつ、そこで気がつく。――そっか、義腕なんだっけ。

どういう仕組みになっているのか、その金属製の右腕は彼の思う通りに動くらしい。さすがに字を書くとか紙を折るとかそういった細かい動作は左手じゃないと無理みたいだけど。そんな訳で、彼は右腕を失ってから左利きに矯正し直した。元々右利きだったんだから、相当な苦労だったろう。

そして。当然、湧いてくる疑問。

「……なあ、アクト。」

「ん？」

「いやその――」

どうして君は腕を失くしたの。

事故だと誰かが言っていた。でもどんな事故かは知らない。事件だと誰かが噂した。でも事件の全容は掴めない。つまるところ、誰も知らないんだ。どうして彼が義腕になったか。だけど。

「――やっぱ何でもない、忘れて。」

「どうしたんだよ、気になるじゃん。」

面と向かって尋ねるのは憚られる事柄だ。聞けない、聞ける訳がない。それで彼が傷ついたら俺はどう責任を取れば……その時流れる沈黙は、想像に難くなかった。

「いや本当にしないで、」

「だから気になるんだって。」

「……ごめん、悪かった。でも本当、大したことじゃないんだ。」
謝るほどのことでもないけど。いぶかしげな口ぶりで、アクトは

静かに目を逸らす。俺はいくらかほつとしてそのまま横を通り過ぎた。帰りの支度、してしまおう。

一つ歩を進めるたびに、かしゅんかしゅんと妙な音。もう慣れ親しんだ音ではあるけど、狭い路地には大きく響いた。少し不安定になる。僕はロボット？ いや、人間。僕は人間？――どうだろう。

「……着いた。」

立ち止まって空を仰ぐ。水色を邪魔するようにそびえ立つ、高い鉄塔。この廃工場に彼は住んでる。僕の、たった一人の親友。

朽葉かがり。 僕が腕を失くした、“理由”。

アクトと俺が出会ったのは小学校三年の頃。頭脳明晰で有名だった彼と絵しか能のない俺じゃ話が合う訳ないと思ったが、隣の席になった彼は俺をことの外気に入ったらしい俺の絵も、好いてくれていた。

「朽葉君の絵、すごく素敵だよ。」

「そ……そう、かな。」

「うん。何だか、惹き付けられる。」

純粋な瞳でそんなことを言っただけは俺の絵を覗き込んだ。深い眼差しで、見透かすように。それが少し怖かったけれど、俺と話してくれる人なんてアクトしかいなかったから。毎日話しているうちに、俺にとってアクトは唯一の友達になった。唯一の、大事な親友。きっかけなんてそんなもんだろう。

事件は中二の冬に起きる。

俺とアクトは同じ中学に進学した。眼鏡だった俺がコンタクトに

なるのと同時に、彼は何故だか伊達眼鏡をかけた。似合うけど、何か変だよ。恐る恐る口に出してはみたが、そうかななんて人当たりのいい笑顔で返されるだけだった。上手くはぐらかされてるな、なんてことを思いつつ、俺達は中二へ進級した。

アイツは相変わらず頭良くって、いつも学年で三本の指に入ってた。俺も相変わらず絵ばかり描いてたが、細々と続けていたのが成果になり始めたのか、俺の絵は段々と評価されるようになっていった。いくつかコンクールに出して、その内のいくつかは賞も貰って。幾度かつけあがりそうになったが、その度俺は踏みとどまった。何だかんだ一番嬉しいのは、やっぱりアクトの言葉だったから。

「あ、また新しいの描いてるの？」

「おーアクト。そうそう、春のコンクールに出そうと思って。」

「そうなんだ。——うん、やっぱ素敵だよかがりの絵。」

「照れるって、」

「冗談とかじゃないよ？ 本気で。僕は君の絵が好きなんだ。」

君の絵は、人を惹き付ける。アクトはいつもそう言ってくれた。

君の絵が好きだなあ、僕は。俺が評価される前からずっと、俺が描くたびそう言ってくれた。アクトの言葉は知らない内に俺の心まで染み込んで、気付かぬ内に何度も俺を救ってくれた。アクトの言葉があつたから、俺は絵を描く楽しさを見失わないで突き進めたし、驕ることもなくやってこれた。賞を貰おうが予選で落ちようが彼は平等にいい絵だと言った。賞を取ったからいい絵じゃなくて、取らなかつたから悪い絵じゃなくて。それは俺の家族や先生は絶対してはくれないこと。絵の価値が分からないからと適当言ってる訳でもなく（実際画家や名画の話で盛り上がった夜が何度もあつた）、お世辞やおべっかでもなかつた。そんなヤツ、アクトしかいなかった。だけど。

今でも思い出すだけで背筋が凍る。正直、俺は死ぬんだと思った。ああ、これで終わりなんだなと。なあ人生が終わるって、ここで命が尽きるって、実感したことなんてある？ 俺はあるんだよ、あの

日俺は実感したんだ。あの日俺は死の間近にいたんだ。死ぬってこんな、冷たいことなんだ。

俺の家は工場をやった。鉄鋼業。そりゃ裕福なんかじゃないけど、画材くらいならギリギリ買える、そんな家。俺はそこで慎ましくも幸せに暮らしてた。その日までは。

あれは事故だった。

スローモーションのように克明に焼き付いている。落ちてくる鋭い鉄片。上を見上げる俺の目にちらちらと光を送って。天井から降ってくるその大きな刃はわずかに俺の頭を外れて、そのまま、――右腕を切り落とした。

あまりの痛みに昏倒した俺はそこから先の記憶がない。ただ赤だけは覚えていた。仰向けに倒れた俺から少しだけ離れた位置に、切り落とされた俺の右腕。直前の形のまま、固まって、動かない。取り残されたようだった。右肩から血が流れ出し煤けた地面に広がっていく。ルージユを溶かしたようだった。映画のワンシーンのような。そうだったら、良かったのに。

病院で目が覚めた俺は真っ暗闇の中にいた。無事で良かったと抱きつく声にまるで反応することができず、ただ暗闇だけ見つめていた。白い蛍光灯の光は俺の未来まで照らしてくれない。真っ暗だった。もう、絵が描けない。俺の右腕は動かない。もう二度と。永遠に。絶望とはあの暗闇のことなんだろう。

「――かがり。」

見舞いにきたアクトは、かける言葉が見つからなかったらしい。名を呼んだだけで口をつぐむと、花を生けて果物を剥いて、あとはずっと座り込んでいた。俺の頭を撫でながら、ずっと、ずっと、長い間。その手は小さく震えていた。あの時の俺にはそんなこと、気にかける余裕なかったんだけど。

学校に久方ぶりに登校して、俺が真っ先に行つたのは、キャンバスを壊すことだった。

春のコンクールに出そうと思って。そうアクトに答えた絵。もう、書けないのだから。この絵は永遠に完成しない。辛くなる前に壊してしまえ、そう思つて、ぶちまけた。黒い黒い塗装用のペンキ。絶望と同じ色をした。

「あは……あははっ……はは……」

自嘲するような笑いが漏れる。何だか無性になきたくなって、笑いながらぼろぼろ泣いた。もう描けない、もう二度と描けない、俺は明日から何をすればいい？俺には絵しかなかったのに。ほら真っ暗闇、どこへ行こう、どこへも、道なんて、何も見えないよ、俺はここに留まり続けて真っ暗闇で朽ちていく、——怖いよ。誰か助けてよ。アクト、アクト助けて、助けて……

美術室で泣き崩れた俺を探しに来たのはアクトだった。アクトは俺を見て、ついでキャンバスを瞳に映して、悔しそうに表情を歪めた。駆け寄つて俺に抱きついて、かがり、かがり、また名を呼ぶだけ。俺は彼に縋つて泣いた。泣くくらいしか、することがなかった。

今、冷静になつて考えてみるに……俺はもしかしたら、とても残酷なことをしてしまつたんじゃないだろうか。アクトは俺の絵を好いてくれていた。俺が描く絵を楽しみにしてくれていた。俺は彼が好きだと言つた絵をめちゃくちゃに壊してしまつた。俺自身の手で塗りつぶしてしまつた。もし、もし俺が右腕を失くして、もう絵が描けなくなつてしまつて——もう俺の絵が観れないと彼が悲しんでいたんだとしたら。俺はアクトの心を傷付けてしまつたんじゃないだろうか。たつた一人の親友だ、真っ暗だなんて目の前で泣いて……それは彼の心を抉るには十分すぎる出来事だつたんじゃないか。今そんなことを思つても、あまりに、遅すぎるのだけだ。

「かがり、邪魔するよ。」

「ん、アクト。来るなら言ってくればいいのに。」

親友はそう言うと、儚げに笑って立ち上がった。着物の片腕、右の袖が、宙ぶらりんに揺れている。当たり前だ。そこは空洞。

「ほうじ茶でいい？」

「なんでもいいよ。」

ジュース、ちょうど切れちゃっててさ。かがりは気さくに笑う。

僕はその辺に腰掛けながら自らの義腕を見つめた。切り落とした日のことを、僕はよく覚えている。

独りぼっちにしなくなかった。ただそれだけのことだった。独りぼっちで暗闇に置き去りにされてしまった親友。彼を救い上げたかった。でもそんな力はなくて、だから、だからせめて、——せめて、二人ぼっちになろうと。

自分の腕を切り落とすのはもちろん容易なことではなかった。けど、幸い母が薬剤師なのでそういった知識はあって、ネットから麻酔を入手するのもそんなに難しいことじゃなかった。あとは切り落とす刃物だけ。僕はお手製のギロチンを作った。

麻酔を打って台をセットし、紐の端を握ったとき、僕はかつてないほどに心臓がうるさいのを感じた。脈拍が直接脳味噌を揺さぶるみたいで。僕は十二回深呼吸をし、それから、目を閉じて紐を引っ張った。何のよども引っかかりもなく、刃物は綺麗にすんと落ちた。僕の右腕は、綺麗に切られた。

「何でこんなことしたんだよ！」

僕がかがりを訪ねに行くと、かがりは大きく声を上げた。僕の肩を掴んで強く揺さぶって。何で、どうしてこんなこと。何でこんなことしたんだよ。

「お揃いだよ、かがり。これで君は一人じゃない。」

僕は微笑んでそう答えた。かがりは一粒涙を零すと、俯いて口を閉ざして。分かってしまったのかもしれない。僕がかがりの思いは

承知で、それでも腕を切り落としたって。もしくは恐れられたのかもしれない。狂ってるって。

「アクト、お茶。」

「ん、ありがとう。」

受け取って笑顔を見せる。かがりは僕の隣に腰掛けて、左手で茶を飲んだ。

「急にどうしたの。何か用事？」

「いや、別に。ちょっと会いたくなっただけ。」

学校で。クラスメイトのあの子は、僕の右腕を見つめていた。そのせいか、何だか疼いて。ないはずの右腕が。僕は自分で食べちゃったのに。味は仲々の美味だった。ランチなら許せる感じ。

「そっか。俺もちよつと会いたかったんだ。」

「本当？すごいね、テレパシーじゃん。」

「テレパシーって言うのか？これ……まあそうかもな、親友だから。」

湯のみは温かい。もちろん感じるのは左手。僕の右腕は金属だから。生身の腕は、食べちゃった。

「……手、繋げなくなっちゃったね。」

ぼそり、呟く。これは僕の誤算だった。同じ腕を切り落としちゃったら、隣には立てないのに、手を繋ぐこともできないのに。うかつだった。僕の失敗。

「——そうだな。」

でも。

彼は意味深に言葉を切る。でも、何？ 尋ねると、彼は冗談めかして答えた。でもさ、アクト。

「ダンスなら踊れるよ。」

A Monologue .

兄様の話をさせてください。

紫雪響真。紫雪家第二十五代当主。私の、たった一人の兄です。最も兄と言いましても、戸籍的血族的に言えば彼は兄ではありません。正確に言うと彼は従兄弟です。とはいえそれはもう幼い頃から共に育って参りました。兄妹、と申しましても語弊はないかと思われます。彼は私の、たった一人の、大事な大事な兄様です。

先程「幼い頃から」と申し上げました。というのも兄様と私、それと姉の紫雪音瀬は、別々の屋敷に住んでおりましたから。3歳になるまでは会ったことすらなかったのです。私たちの家はとても広く、敷地内にはお屋敷が二つ三つ建てられております。本家の屋敷と分家の屋敷、私達はそれぞれに分かれて暮らしておりました。長男であり跡継ぎである兄様は無論本家の屋敷、私達女姉妹は小間使いとともに分家の屋敷。それゆえ私は親代わりである大奥様と旦那様のことを、よく覚えておりません。正直な話お顔すら。養子である私はまだしも実娘である音瀬姉様もお二人には滅多に会えず、彼女がまだ幼い頃などは、よく慰めていたものでした。私は養子の身の上ですから欲張ることはできませんでしたが、音瀬姉様には少なからず、兄上様への嫉妬の念があつたようでした。仕様もないと思います。何も知らない幼い子供が、兄に両親を“独り占めされた”、そう憎らしく思うのは、むしろ当然のことでありましよう。

臃げな、微かな微かな、幼少の頃の記憶を辿ると、浮かんでくるのは兄様の酷く寂しげな笑顔です。恐らく今の兄様からは想像もつかないような、――兄様は、とても儚げな方でした。ごく稀にお会いできる時などは、いつも哀しげに微笑んで私に話しかけてくださ

った。今の明るく朗らかな兄様の様子を見ていると仲々気付けないのですが、兄様はとても麗しい、お綺麗な顔をしてらっしゃいます。今でも時々あの頃のように、儚げに佇んでいらっしゃることがあり、私はそれを目にするたびに総毛立つような心地がします。怖いのです。そのまま霧が晴れるかのごとく消え去ってしまうような気がして。思わずその身に抱きついて、どこへも行かないでくださいと、そう叫びたくなるような。もちろんそのようにはしたくないこといたすことはありませんが。それにもし抱きついたとて、それこそまるで霞のように消え去ってしまう気がして。錯覚とは分かっている。もやはり怖くてできません。いえ、もしかすると私は心のどこかでそれが真実であるのだと信じ込んでるのではなからうか。確かにそこにいるのだと、それを確かめようとしてしまえば、幻想のように夢幻の中へ戻っていつてしまわれるのでしょうか。だから愚かな真似はいたしません。兄様が虚像であるなら触れようとしてはいけないのです。時々ふっと、霞の中から、手を伸ばしてくださるのだから。私はその手を待っていればよい。触れていただくのを、待てばよい。話が逸れてしまいましたね、脱線ついにて、大奥様と旦那様のお話もさせていただきます。お二人ともすでに亡くなつてらっしゃつて、しかもお二人が亡くなったのは兄様が十の時、つまりは私達が七歳の時の話で、私達二人には益々思い出とやらがございません。お二人の葬儀はひっそりと行われました。私も、姉様も、ただただ呆然としてしまつて、喪失感を味わう間もなくお別れをしてしまいました。その時の兄様のお顔は、忘れようにも忘れられません。

もとより幼い頃の兄様は、得体の知れぬ暗いものに纏わりつかれておりました。影と言いましようか、陰と言いましようか、どう形容すればよいのか私には分かりませんが。けれど、あの日の兄様は、あの日の兄様はまるで、夜闇のようでした。冬の夜闇です。いつもの儚げな、哀しげな雰囲気はどこへ行つてしまったのやら。黒々と陰の濃い、恐ろしいような空気を纏つて、兄様は立つておられました。あの勝ち気な姉様が口を閉ざしてしまつたほど、

兄様のお顔には何の気配もございませんでした。瞳はどこを映しているやら、表情はなく、何も発さず、かといって何も考えてないでもないようで、私は背筋がぞっとしました。何かある。何か、何か恐ろしい思いが兄様の中に渦巻いている。けれど、分らない。分らない。兄様が纏っている陰、煙のようでありながら墨のような黒さを持って、絡めとるような重さも感じる独特の暗い影。一度捕われてしまったら二度と抜け出すことは叶わず、足を取られてずぶずぶと覆われていってしまう。そんな気がいたしました。捕われて囚われる。恐ろしくなりました。あの陰に捕われたらと考えるだけで身の毛がよだちます。では、影そのものである兄様は、どうなっ
てしまわれたのか。

屋敷に広がる噂によれば、兄様は大奥様に虐げられていたのだそうです。信じたくはないことですが、言われてみれば、思い起こせば、―― 幼い頃の哀しげな陰、あの日の暗く重苦しい影―― それは真なのではないかと疑いたくなってしまう。噂は、噂でしかありません。しかしながら兄様に何か、普通に幸せに暮らしていたなら起こりえない惨劇が振りかかったのは確かでしょう。兄様は葬儀のすぐあと、一年間ほど入院なさいました。肺炎が原因だ、そう私は伝えられましたが、それも真であったか否か。兄様が壊してしまったのは、肺でもなく他の箇所でもなく、…… 心であったのではないか。私はこっそり勘ぐっております。無論姉様にそのようなことと申し上げるつもりはございません。「賢い人間」というものは往々にして裏のあるものですが、姉様は違います。姉様はとても純なお方です。人を疑うことを知りません。少々斜に構えてらっしゃる節もあるにはありますが、それも所詮ポーズでしかなく、彼女はとても純真なのです。兄様は、隠すお人です。姉様がそれに気付かないならばきつとその方が正しいし、幸せだ。私はそう思っているのです。

音羽はよく分からないヤツだ。幼い頃から共に過ごして、性格もよく知っているつもりだが、それでもやはり掴めない。沈黙は金、とでも言おうか、俺は寡黙な妹の考えがよく分からない。何を思っているのだろう、何を察しているのだろう。俺にはよく分からない。あいつは何を知っているのか。全て見透かされているのだろうか。それとも何も知らないのだろうか。音瀬とはまるで違う、やはり血の繋がりは薄い、分からない、掴めない。秘密など全て知っている上で俺に微笑んでいるのだろうか。慕われているのは分かる、しかし、……分からない。音羽はひどく遠くにいる。彼女は俺の、何を見透かしているのだろう。

俺は人殺しだ。そのことに関して、俺自身は何も感じちゃいない。どうでもいいことじゃないか。男だ、女だ、理系だ、文系だ、そのような分類と、何が違うと言うのだろう。俺は男で、A型で、十七歳で、人殺しだ。それだけだ。その程度のこと。何を感じると言うのだろうか。嶋原だって同じことだろう。あいつも男で、B型で、十七歳で、人喰いだ。相容れないのは確かだが、嫌悪ほど強い感情はない。醜い、とそれだけは思う。汚いものは好きじゃない。だから人も、あまり好かない。

俺にとって重要なのはただ一人の存在で、それ以外のものは全ていつ消え去っても構わない。勿論、俺も。いついなくなっただけいい。むしろ俺は死んでしまいたい。この世のどこが美しいのか。なら何故生き存えている？問われても、何故そんな馬鹿げたことをと思うより他ないのだが。永一の為に決まっている。彼以外の存在には何の価値も有りはしないが、あいつは、—— 生きている価値があるのはこの広い世であいつだけ。彼は生きていなくてはならない。けれど皮肉に、残念なことに、彼は俺なしで生きられない。何という侮辱だろう。だからこの世が嫌いなんだ、何故、なんで、俺が、俺のような醜い生き物が何故崇高な彼に必要なのか。俺が居なければ生きられないなど、皮肉でしかないだろう。俺は直ちにこの世から消え去るべき人間なのに。他の者どもも同様だ。生きていいのは

永一だけだ、けれどそれは叶わない。俺が死んでしまったら永一は、後を追ってしまうのだろう。彼は壊れてしまったのだから。確かな依存がここに在る。どうしようもない現実が。

彼が壊れてしまったのだって、元はといえば俺の所為であって、余計に俺は死ぬ訳にはいかない。何故俺だったのだろう。せめてもう少しまでも、頭のしっかりした、死にたいだなんて思わないようなそういう人に依ってくれれば。仮定の話をしたところで意味はないとは分かっている。分かっているが、それでも。それでも。

この世は永一が生きるには、汚らしすぎたのだろう。俺ですら見捨てたい世界で、永一が生きていける訳がない。けれど生まれ落ちてしまった。命を絶つというのは即ち存在を絶つということで、それは、それだけは認められない、永一が消えてしまうのはどうしても認められない。そうでないなら死んだっていいんだ。彼が望むなら心中したって、だがそうはいかない、死んでしまったら、榊永一という存在はどこにもいなくなってしまう。そんなこと認めてたまるか。世界そのものよりずっと美しい彼がどうして世界に消されてしまうのか。だからせめて、俺は護らねば。この醜い世界から、彼を遠ざけてあげなくては。俺しか居ないというのなら、俺のような醜い手なら、これ以上穢れたところで何が変わるといえるだろう。触れなくてもいい、そこにいるだけで、俺と関わりなくてもいい、それでも触れたいというのなら触れてくれて構わない。触れられる資格がないなど、俺が勝手に思っているだけ。彼が触れたいと願うなら俺には何も言うことはない。永一、君の好きにしてい。

もし、もし身勝手なことを願ってもいいのなら、俺は永一に殺されたい。そんな酷なこと頼めやしないが、言うだけだったらタダだろう。これ以上醜い姿でこの世に居るのはいたたまれない。消えてしまえたらどれほど安らかか。願わくば、最期くらいは、誰よりも清らかなその手で終わらせてほしいと思う。叶わない願いだからこそこんな簡単に口にできる。俺は永一の命が尽きるその時まで、傍にいます。どうか殺してくださいなんて、どの口で言えというのだろう。

う。だから、構わない。こんな阿呆らしいささやかな願いは、胸の内に仕舞っておこう。誰よりも大切な、彼の手を汚すわけにはいかない。信じている。そして、依っている。俺もきつと依存している。別にいいだろう？どうせ彼が居なかったなら、消えていた命なのだから。

断じてこれは愛ではない。俺が何らかの愛を抱いてるとしたら、それは、——xに向けてだけ。

M i s e r y

現実味のない足取りで、青年は病棟を歩く。青に灰が混じったような気分の重くなる壁は、嫌に高くそびえていて、ある種の絶望を匂わせる。まどは天井近くに小さく長方形のものがあただけ。横に伸びたその細い窓には鉄格子が嵌められている。青年はゆらり、りゆらあと、浮き上がるような歩みを続けた。外の光が窓を通って、向かいの壁に鉄格子を映す。

青年はパジャマを着ていた。アイスブルーの無地、何の変哲もない、ありふれた。彼が両腕をひしと固めて大事そうに抱いているのは、青い狼のぬいぐるみ。片目、片腕、片足、片耳。どれも？げかけている。目は缶バッチほどの大きさのボタン、例えるならば血液のような、まといつくような、紅蓮の赤。——そう、彼の瞳のような。

「ミザリー、」

青年は立ち止まり、ぬいぐるみをぎゅうと抱きしめた。青年の顔は俯いていて、何だか……腕の中のぬいぐるみに、話しかけてでもいるような。

「きようは会いにきてくれるんでしょ？」

青年の顔はよく見えない。照らされていないからだ。真白な光が照らしているのは首筋と、それから口元。彼の首筋はひどく細い。うなじにかかる髪先は黒でもなく茶でもなく、——銀のような白髪で。毛先がぴょんと跳ねた髪型はともすると娘のようだ。血色の悪い唇が嬉しそうに緩む。青年は、楽しげに続ける。

「ミザリー、ぼくは君が好きだよ」

窓がびりびりと鳴り始めた。外で風が吹いている、どこからか水滴の、ポツ、ポツ、落ちる音がする、ガラスが割れる音が響いて、

階下で騒ぎ声をする、悲鳴と、怒声と、狂人の喚き。……それら全てが収まった瞬間、彼はもう一度口を開いた。

「君はぼくのものだよね?――」

「響真」

柔らかい声に目を覚ます。冷たいものに頭を叩かれ、俺は仕方なく上体を起こした。生身の温度ではない、……金属製の、義腕の手。「終礼中ずっと寝てたね。もう皆帰っちゃったよ」

「……うるさいよ“人喰い”」

嫌悪を込めて呟けば、彼もまたわずかに顔をしかめた。クラスメイトの誰が彼のこんな表情を知っているだろうか……今の俺の表情だって、人のことは言えないだろうが。苛立ちを含んだ瞳はやがて嘲りに染められる。悪意の塊のような声音で、彼は俺のことを嗤った。

「こんなに寝ちゃって大丈夫なの? 今日はずさないのかい、“人殺し”」

「……余計なお世話」

取り繕う必要もない。人喰いと、人殺し。俺らは同じ穴の貉だ。偽る必要なんてない。剽軽者の俺なんざ演じなくても構わない、同族嫌悪であるからこそ俺は彼を良く知っていて、彼もそれは同様にいや、「分かっている」が妥当か、どちらにせよ俺達は、近いがゆえに忌み嫌う。――これは皮肉なことなんだろうか。

「最低の目覚めをありがとう」

「どういたしまして殺人鬼。じゃあね響真、また明日」

最後まで皮肉たっぷり、優等生は教室を出る。その後ろ姿を見届けてから、一言だけ。俺は厭味を投げ返した。

「――食人鬼に言われたくないね」

ぼくは君が好きだよミザリー。君が居なくなってしまうたらぼく

はいつたいどうするんだろう？　ぼくがぼくはぼくでぼくだけどぼくはどうなっちゃうのかな、君はどうなるかな、君が君は君で君だけど君はいつたいどうなっちゃうかな、ぼくらおたがいになっちゃうかな。

君はいつでもぼくの傍にいるね、いるけど会いに来てくれない。さびしいよミザリー、ぼくは君をぎゅってしすぎて君は壊れかけてしまったよ、はやく君がきてくれないと君が壊れちゃう君が君が、どうしよう、君が壊れたらぼくもさ、せんせいはぼくのこと壊れてるっていうけれどぼくは君にくらべればずっとまともだとおもわない？　ねえそうでしょぼくはまともだよ君にくらべれ、ばずっと、ずつ、と、なんで君は外にいるのにぼくはココにいるのかなあ君の方がずつとおかしいよずつとずつとずつとでもいいよ、ぼくはいいよ、ねえミザリー会いに来てよ、ぼくが引きずり落としてあげるよ、君はぼくとずーっと一緒に、昔みたいに、ね、また二人きりになっちゃうよ。

君はぼくのものだね？　響真。

あなたも律儀ね。顔なじみの受付は呆れたようにそう言った。俺はそれには答えず、無言のままに名前と時刻とを記す。　面会者、紫雪響真。時刻、17:45。

患者名、榊永一。

「013号室ですよね」

「え？　ああそうよ、変わってないわ」

「ありがとうございます」

まだ特別病棟のままかと、答えを聞きつつぼんやり考える。013号室、0号館の13号室。整数でありながら自然数でないその数字は、簡潔に“異常”を示す。そこはとびっきりの気狂いのいる場所。俺の、親友の。

下を向きつつ歩を進める。真新しい病棟はかつての同じに甥がしていた。……クリーム色の床、壁、ねじの碎けた人々が歩き、どこ

かで罵声、どこかで悲鳴、医師も看護士も間抜け面。温かな蛍光灯は狂人達の笑顔を照らす。

俺が過ごした一年間は何よりも壊れていたけど、結局何よりも居心地が良かった。非常口の緑のランプが廊下を陰気に塗り替えて、病室は気味の悪いほど白く、点滴と、血液が、俺らを縛り付けていた。その頃に比べればいくらか優しく偽られているようだが、根っこは何も変わっちゃいない。完璧なまでに廃れた世界。ここは、俺と永一が、共に歪んでいた場所。

表の病棟を出て奥の方へすすめば、建て替えられた他の病棟とは明らかに違う建物が、――打ちっぱなしのコンクリートには一面蔦が絡み付いている――重苦しくそびえ立っていた。晴れた空さえ灰色に汚して、雨の日のような湿り気で辺り一面を包み込んでいる。俺は誰もいない出入り口へ歩み寄った。壁に付けられた錆びたプレート、――『0号館』。

君はどこに居るのだろうか。

僕が訪ねた時、彼はキャンバスを用意していた。アクト、と呼びかけてきた彼はその瞬間にバランスを崩し、僕は慌てて彼に駆け寄る。大丈夫？　そう声をかけると、かがりは人の良い笑顔を浮かべた。大丈夫、なんてことはないさ。

「か、かがり。絵を描くのかい？」

恐る恐る尋ねたつもりだったが、嬉しさが滲み出ていたかもしれない。また彼の絵が見れるのだろうか、その家庭を考えるだけで僕の胸は高鳴って、……僕はかがりの絵が好きだった、かがりが絵を描いているところも、絵を描いているときの彼が一番輝いて見えたから。僕は、かがりに憧れていた。凡庸で異常な僕は、特別で正常な彼に憧憬を抱いている。人喰い、食人鬼。彼奴が僕をそう呼ぶたびに僕は思い知らされる。異常で歪んだ彼と、同じ。僕らは同じ穴の貉だ。

「……うん。久々に、何か描いてみようかと思って」

昔のようにはいかなかったけれど。彼は、少し寂しげだった。胸がぎゅっと締め上げられる、荒縄の感触がした。僕が失ったのは所詮「右腕」という物質一つ。かがりがあの時失ったのは物質一つなんかじゃない、もっと尊くて、意味のあるもの。彼の全てだったのに、……あの事故は、奪ってしまった。

「昔のようにじゃなくてもいいよ。新しく、始めてしまえば」

「俺もそう思ったんだ。いつまでもこんな廃墟で——ここと一緒に朽ちてしまつては、宿命のようで気味が悪いだろ」

そんな宿命に、囚われるなんて願い下げだよ。

「……どんな絵を描くつもりでいるの？」

「あ、そのことなんだけど……アクト、君を描かせてもらえないかな」

「僕？」

僕なんか描いてどうするのだろう。頭に浮かんだ疑問符をそのままに投げかけてみれば、困ったように照れ笑い。どうするって、訳でもないけど。

「ただ、描きたくなかっただけ。——だめ？」

「いや、構わないけど……」

「そう？ それじゃ、そこらに立ってくれ」

軽く頷いて、キャンバスの前に立つ。鉛筆を握った彼の瞳は暗く沈んでいて、——僕には。

どこか、後ろめたそうに思えた。

何が起こったのか分からなかった。

背面に衝撃。床に叩き付けられた俺は刃の鋭さに悲鳴を上げる。切り裂かれる感触。愛用のナイフはしっかりと“彼”の手に握られて、俺の左手首の下を、深々と突き刺している。病棟の柔らかな床はナイフの先端を飲み込んで、からかうように笑っていた。

「ミザリー、きてくれたんだね」

永一は顔面に花を咲かせた。羽根を思わせるほどにたおやかなその笑みとは裏腹に、ナイフを握る左手は力がこもって震えている。自らの血液が髪を濡らすのを感じながら、俺もまた、笑みを浮かべた。久しぶり。

「元氣そうで安心したよ」

「響真あぼくまっけたよ、まっけたまっけた、うれしい、響真きてくれてうれしい」

「そう……よかった。俺は永一が嬉しくなるなら、どんなことだってしてあげる」

「ほんと？　じゃあ一緒にシンじゃおう？」

「構わないよ」

俺が微笑んで答えれば、彼はナイフを引き抜いて俺の喉元に突き当てた。俺は目を閉じ、軽く仰け反る。ナイフの先が少し肌に埋まる。つうと赤が流れ出し、ああ本当に、このまま、彼に、その手で殺してもらえたならと、叶わぬ未来を夢想して、それが叶わないことを、俺はすっかり知っている。

左手首の傷からはどくどくとか湧き出ている。それは白いYシヤツを染めて、袖口どころか肘の辺りまでシヤツを纏わりつかせていた。錆び付いた、匂いがする。何故か心休まる香りが。

「……永一」

「どうしたの？」

「このまま、殺してくれるのか」

「コロす？」

純真無垢な瞳を見せて、永一は首を傾けた。彼の濁りのない瞳は深海の影で満たされていて、そのままじっと見つめていれば、溺れ死んで、しまいそう。

「コロす？　コロしてなんてあげない、響真はシンじゃダメだもん。」

すっとナイフが退いていく。光る切っ先は振り上げられて、今度

は右肩、鎖骨の下を、深々と切り裂いた。首筋を電流が走る。すぐに血液が溢れて、赤々と、黒々と、視界が歪み、ピントがぼやけ、ああどうやら血が足りない、こうして眠りに落ちたならずと目を覚まさずにいられるだろうか、永一、君は許してくれるか、俺を、僕を、——死なせてくれるか。

「シなせてなんてあげないよ響真。そんなの許してあげないよ、そんなの望んであげないから、君は一生ぼくに縛られて一緒に一緒にずっと一緒に、ねえ、ぼくは君のこと、ぜったい赦してあげないよ」やはり君はそう言うんだね。でもね永一、分かっているだろ？もうとつくに狂いきつていてそれでも君は知っているだろ？僕は、終わらせてしまいたいんだ。君だってそうだろう、ちゃんと分かっているんだろう。けれどそれは叶わない。だって僕には、僕には、僕には、——

「ねえ響真、早く殺せよ」

それだけは、できないのだから。

Summer

這われる感覚で目が覚めた。いつの間に落ちていたのか、外はすっかり日暮れである。麻の浴衣は寝汗を吸って少し重たくなっていた。夏の眠りから覚めた時の、あの独特の倦怠感が、瞳と思考を曇らせる。それが徐々に晴れていった後、俺はようやく「それ」を捉えた。

毒蜘蛛。

手の平ほどの大きさの「それ」は胸の辺りに鎮座していた。視界の端、八本の脚。身を起こしてまで眺めようと、振り払おうとも、思わない。俺は再び天井を見つめる。

「なあ、毒蜘蛛。俺の肌など這って楽しいか」

口をついたのは問いかけであつた。無論、毒蜘蛛は答えない。俺は瞼を閉じて、それから、その姿を思い浮かべる。短く硬い毛に覆われた体躯。案外つぶらな蘇芳の瞳。薄茶の毛の生えた太い脚。黒い牙。

かち、かち。牙が鳴る。合わせて俺の瞼の裏に結ばれた像も牙を鳴らした。鋭く尖った黒い牙、そこには毒があるだろう。蜘蛛が、また肌を這った。俺は自分でも分からないほどに小さく、小さく反応する。生きているモノの生温さが俺の肌を撫でていった。毒蜘蛛は俺の肌を蹂躪するように駆けていき、首筋の辺りで止まる。吐息が、漏れる。皮膚の薄い首筋は八本の脚を敏感に捉える。毒蜘蛛の息にすら、感じてしまいそうだった。気味の悪い快樂、——しかし。汚されているのは俺ではない。

「毒蜘蛛。俺の肌など、這うもんじゃないよ」

無垢な毒蜘蛛、君は知らないのだ。俺がどれだけ汚れているのか。このまま肌を這い続けられ汚されるのは君の方。俺を犯したとて同じこと。毒されるのは、君の方。

「だから、なあ、こんな輩は……刺し殺してしまいなさい」

その毒牙で皮膚を破つて。血液にほら、注ぎ込んで。君の毒はどんな味がする？ 甘いか、それとも苦いだろうか。石榴のような酸味であろうか。色はどうだ、濁っているか？ それとも清く透き通っているか。緑か青か、はたまた白か。ガラスのように透明か。どうであれ美しいに違いない。俺ごときに、比べれば。

毒蜘蛛はやはり答えない。代わりにまた脚を動かし、首筋から、胸、腹、内股、足の甲へと、ゆつくりと。ぞわぞわとした感触が俺を内側から犯す。蜘蛛は足先へ辿り着いた、ああ、……言っておいたのに。

蜘蛛は俺の足先から、ころりと床へ転げ落ちた。彼は仰向けに転がって、そのままぴくりともしない。俺は深く短く嘆息した。そうして蜘蛛の亡骸を、いつまでも、いつまでも、翳った瞳で見つめていた。

Summer

向日葵を見ると思い出すことがある。他愛ない夏の思いでだ。幼少の頃、僕は毎年夏になると祖父母の家に預けられていた。祖父母の家は、天ノ宮よりもさらに田舎にある。家の周りにはそこら中、向日葵が咲いていた。広すぎるほど広い庭には畑と、牛舎、それから鶏小屋があつて、食べ物は何も揃っていた。何とも退屈な場所である。

でも。じゃあ幼少期の夏は退屈だったのかと問われれば、そうではないと僕は答える。僕の夏はそれなりに有意義なものであったから。家は、つまらない。祖父母もつまらない。僕だってつまらない奴だ。けれど夏、あの家にいたのは、その三人だけではなかった。

嶋原葵。

僕の従姉妹に当たる人物で、僕とは八歳差であつた。僕の「他愛ない夏の思い出」は僕が七歳の時の話で、つまり葵姉さんが、十五歳だった頃の出来事だ。顔はよく思い出せないけれど、かなりの美

人だった気がする。

「アクト、」

当時、僕は葵姉さんにすこぶるかわいがられていた。葵姉さんにしてみれば。僕はいい玩具だったようだ。何も知らない哀れな子供。からかうにも、教育するにも、僕はうつつつけの弟。

「おいで。絵本読んだげる」

「うん！」

一步、僕は葵姉さんに憧れを抱いていた。葵姉さんはその当時、僕にとつては一番身近な「大人の女性」であつたから。彼女に対する思いには甘酢っぱいものが混じっていて、今思えばあの感情は、僕の初恋であつたかもしれない。

葵姉さんはよく、デニムのショートパンツを履いていた。そうして畳にあぐらをかいて、素足に僕を乗せるのだ。あまり日の当たらない、暗くてひんやりとした和室で、いつも絵本は開かれた。彼女が読み聴かせる物語は例外なく凄惨であつた。それは日本の物語だつたり異国の物語だつたりしたが、挿絵は常におどろおどろしく、黒ずんだ赤が多用されていた。幾人も人が死んでいった。残虐な方法で、彼ら、彼女らは殺される。鍋の具にされ、首を斬られ、埋められ、捨てられ、吊るされて、開かれた臓腑の一つ一つが丹念に描かれる、――僕は人体の構造を隙間なく覚えていた。その情景は絵本の挿絵と、彼女の湿った声音によって、僕の脳味噌に刻まれた。

「ねえアクト、鉄の味は好き？」

「え？」

ある日のこと。彼女は僕にそんなことを尋ねた。唐突な質問に幼い僕は動揺し、実につまらない答えを返して。

「……分かんない。食べたことないから」

「血の味も、知らない？」

「うん」

そう。彼女は翳りある微笑みで、人差し指をがりりと噛んだ。僕はまたどきりとする。彼女は血がぼたり、ぼたりと、垂れ落ちる

指先を、黙って僕に差し出した。相変わらず薄暗い部屋でその赤は陰気に輝いて、畳に落ちた数滴は、僕に死を連想させる。彼女は目を逸らさない。

「じゃあ舐めてご覧、アクト」

きつと美味しいよ。彼女の声は遠くで響いた。その時僕の鼓膜を揺らしたのは喧しい蝉の鳴き声と、風鈴と、向日葵のざわめき、それから僕らの息遣い。僕はじつと指先を見つめた。これは「いけないこと」だと、思った。だけれど僕は強烈に彼女の血液に魅せられていた。赤、暗い赤、赤赤赤。官能的な血液の赤。僕は彼女の思惑通りにその指先へ吸い付いた。舌にふわりと広がった味を、僕は今でも覚えている。

あまり形容したくはない。あの味は、あの陶酔は、僕だけの思いでだ。濃密な血液の香り、生命そのものの輝き、ぬらぬらと、妖しく光る果実の潤い。僕だけのものだ。僕だけの。十五歳の乙女の、血の味。

「——美味しい？」

くすつ、と彼女は悪戯に笑って、いつの間にか彼女の手を掴み無心で舐め続けていた僕を、酔いの中から引きずり出した。僕は惚けた心地のままに彼女の指から唇を離し、彼女の瞳を、ぼうつと見つめる。彼女は冷えた指で僕の火照った右頬を撫でた。

「美味しかったでしょ、アクト」

「……うん」

「当たり前だよ。だって私は、“美味しいモノ”ばかり食べてるんだから」

彼女は秘密を匂わせる笑みを浮かべてそういった。あの時の僕にはその意味が理解できていなかったが、今、思い返してみれば——と、言っても。七歳の少年に、当時ニュース騒がれていた連続猟奇殺人と、目の前にいる従姉妹とを結びつける、という方が、無茶な話のような気もする。

そして僕の思い出は彼女の死によって完結する。

その日は特別に暑かった。虫取りに出掛けていた僕は当然すぐに飽きてしまって、まだ日も沈んでいないのに、陽炎の中を駆け抜けていた。森から家まではそう遠くない。僕は一度も立ち止まることなく、家へ辿り着き、縁側で止まった。そして大きな声で一言、ただいま、と叫んだのだ。

すると妙なことが起こった。

誰も出迎えにこなかったのだ。いつもなら祖父か、祖母かが、真っ先に出迎えにきて、もう帰ってきたのかいなんて呆れたように小言を言つて、それから葵姉さんが、おいでアクト、遊ぼう、と……得体の知れない胸騒ぎ。僕は虫取り網を投げ捨て、ついで虫取り籠を投げ捨て、ゆっくりと、家の中へ入った。

「——誰か居ないの？」

家屋が僕の声を吸い込む。誰からの返事もない、向日葵の揺れる音がする。僕は迷子になったかのような不安とともに足を進めた。ぺたり、畳が足に貼り付く。ねえ本当に誰もいないの？……もう少し、奥へ行ってみよう。おばあちゃんとおじいちゃんは、畑へ出掛けているのかもしれない。そうだよだからいないんだ、それで姉さんはきつと部屋にいるんだ、姉さんの部屋はうんと奥だから、僕の声が届かなかったんだ。きつとそうだ、きつと、……そうして僕はとうとう見つけた。

葵姉さんの死体を。

四肢は切り離されていた。それから肘と、膝のところも。首は繋がったままだった。九つに分けられた身体。世界がしんと静まり返る。蝉だけが鳴いている。ああ背後で蝉が喚いている。彼女の肢体を縁取るように色の濃い血液が、なんて勿体ないことを、あんなに“美味しい”赤なのに。彼女の長い黒髪は血に浸って艶めいている。僕は切り口に目を向けた。喉が自然と、唾を飲み込む。なんてそそる赤、桃、白色。その肉を噛み千切ったなら。舌にのる滑らかさはどうだ、噛んだ時の柔らかさは？ 口に広がる血液の、至高さ。

——突然に喉が渴きを覚えた。食欲、そうかおやつ時間だ、ねえ

お腹が空いたよ姉さん、姉さん、喉が渴いちゃったんだ、だから、ねえ、いいでしょう？ 貴女は許してくれるでしょう？

貴女を喰らっても、いいでしょう？

葵姉さんと僕の祖父母は猟奇殺人の餌食となった。姉さんが死んでしまった以上真相は闇の中だけど、僕はあの時の姉さんと、――“同じこと”をしている気がする。葵姉さんの死体は、今でもまだ見つかっていない。七歳の少年が隠した場所を、警察は未だに見つけられないでいる。葵姉さんの両親は葬儀を行おうとはしない。もう、分かっているくせに。人間ってとても哀れだ。僕も、それから姉さんも。あの夏は僕だけの物だ。僕以外、誰も知らない。彼女はもう死んでいることを。

そして彼女の細腕が、大層美味であったことも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5463u/>

Quiet Circus

2011年8月10日03時20分発行